

メディアと政治との関係

～接近という現象の正の側面～

1210396 池畑 和樹

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. はじめに

1-1 背景

メディアの重要な機能として、批判機能がある。メディアは権力者から独立しており、権力暴走を抑止するための抑止力として、批判機能を持っている(奥村,2008)。樋口美智子はメディアと権力の接近について「報道と権力の癒着によって、国民の健全な批判の目が失われる危険を伴う(樋口,1996)」と指摘し、メディアと権力の接近に否定的な見解を持っている。

1-2 問題意識

メディアと権力の接近を否定している樋口の理論からすると、メディアと政治家の接近は負の帰結しか生まないということになる。もし、負の遺産しかのこさないのであれば、政治家に積極的に接近していた日本最大のメディアのトップである渡邊恒雄を、どのように評価したらよいのだろうか。これが、本研究の最も重要な問題意識である。

1-3 目的

本研究の目的は、メディアが権力に接近した際の正の側面を明らかにすることである。また、正の側面があった場合、正の側面に渡邊の生い立ちがどのように影響しているのかを明らかにする。

2. 研究方法

本研究では、日本最大のメディアのトップである、読売新聞社主筆の渡邊恒雄について、公表されている文献、記事、映像のアーカイブス等に焦点を当て、メディアが権力に接近した際の功罪について明らかにする。

3. 渡邊恒雄の生い立ち

3-1 幼少期～中学時代

渡邊は1926年に東京豊多摩郡に生まれ、現在(2021年)は94歳である。父親は同族銀行の行員で、渡邊が8歳のころに、癌で死去している(御厨貴,2000)。父親は生前、11軒の建物を所有していた

ため、家賃収入で不自由なく暮らしていた。幼少期渡邊は、詩人になろうとしていたが、そのきっかけは国語の授業で童謡詩を書いたことであった。後日、教師が生徒の書いた童謡詩の中からひとつを黒板にかいた。そこに「渡邊恒雄作」とかいてあり、その詩に曲をつけて生徒全員で歌ったことから、詩人の才能があると思い、詩人を目指した(御厨貴,2000)。

渡邊は幼いころから、母親に算術や、国語を叩き込まれていたため、勉強漬けの生活を送っていた。さらに、母親が家庭教師を雇ったことで、渡邊の勉強漬けの日々はさらに加速していった(御厨貴,2000)。

これまでを見ると、幼少期の渡邊について、渡邊の母が教育に力を入れていたことがわかる。その背景には、夫、すなわち渡邊の父を早くに亡くしたことがあり、息子には学力をつけて手に職を見つけてほしいという思いから、教育に力を注いでいたことが考えられる。この母親の教育姿勢が、渡邊の勉強熱心な一面を作り上げたと考えることができ、圧倒的知性を構築する土台になったことが推察できる。

また、家庭教師を雇うことができる環境にあった渡邊家は、比較的裕福であったことが推察できる。渡邊の父親が生前に残した遺産のおかげで、渡邊は教育を受ける場を増やすことができた。渡邊自身も比較的裕福な家庭にあることや、そのおかげで教育の機会を得られたことを子ども心に感じていたのではないだろうか。その当時感じた、貧富の差による教育の差が、後の「私学助成金カット阻止」の原体験になっていると推測できる。以上のように、幼いころから勉強に打ち込んできた渡邊であったが、第一志望の中学に入ることはできず、第四志望の開成中学に入学する。

渡邊は、開成中学二年のときに、クラスでトップの成績で級長となり、制服の袖に二本線をつけていた。開成中学では、級長が制服に二本線をつけることが伝統であった。しかし、3年ときに、漢文の教師から、「君なら何度でも一番をとって級長をやれる。だからほかのやつにも級長の機会を与えてやれ」と級長の権利放棄を要求された。その結果、成績4番で士官学校を受けると張り切っていた軍国少年が級長になった(御厨貴,2000)。

もし軍国主義に傾倒していなければ、その者は級長になることが

できないことを目の当たりにしたことにより、渡邊は軍国主義に対して不信感を募らせていったと思われる。

渡邊は、中学二年のころ文学から傾倒し始め、夏目漱石や森鷗外などを読み、詩人を目指していた。しかし、渡邊は自分の書いた詩、小説ともに満足のものをかけず、詩人の夢を諦めた。そこで、ものを論理的に考える哲学なら才能がなくてもできるはずだと考えるようになり、三年生の時に哲学者になることを決意する。その影響を与えたのは、同級生の遠藤哲夫であった。遠藤は、詩人で良い詩を書き、哲学に凝っていた。渡邊は、「遠藤は、非常に早熟な男で、文学、哲学は彼の影響だった」と語っている(御厨貴,2000)。

3年、4年ごろに「この戦争は負ける」と友達の父親から聞いた渡邊は、天皇のことを「テンちゃん」呼び、天皇崇拜など全くしていなかった。また、天皇の名のもとに暴力を振るう配属将校がいたため、これに対する猛烈な反抗心から、渡邊は反戦・反軍になった(御厨貴,2000)。

このように幼少期に芽生えた軍国主義に対する不信感が、反抗心に変わり反戦・反軍になったことが推察できる。そこには、中学で学び始めた哲学が影響していると考えられる。

軍国主義に対する猛烈な反抗心から渡邊は、配属将校に向かって、「開成のガン」と怒鳴ったことがあった。不良行為を続けた渡邊は、このままでは放校処分になることを危惧し、東京高校に編入する。この時の心境を「5年間開成中学にいたら確実に放校処分になるから、4年で逃げ出してしまうおもうと思ひ、四年修了で入りやすい高等学校を探して東京高校に入った」と語っている(御厨貴,2000)。

以上のことから、渡邊は軍国主義に対して猛烈な抵抗を見せていたことがわかる。それと同時に日本全体を統治していた軍国主義の強さを肌で感じたにちがいない。退学を危惧して東京高校に編入したことも、軍国主義からの逃避であったと推察できる。軍国主義と渡邊との戦いは、中学時代から始まったと考えられる。

また、「負ける」と言われながらも国民を犠牲にする戦争に対して、憎悪の感情があったことも明らかである。哲学を学び始め、常に戦争をする意味を考えていた渡邊だったからこそ、子どもながらに軍国主義に対して反抗をしていたのだろう。

3-2 高校時代

太平洋戦争が始まった戦時中、旧制高校の一種のロマンチズム、大正教養主義、あるいはそれに基づく自由主義的な世界が高校にあると思っていた渡邊であったが、高校に自由主義的な世界はなかった。東京高校に入った理由として、「東京高校の校長が哲学者だっ

た(御厨貴,2000)」と述べている。しかし、その哲学者が突然狂い始め、「東京高校は陸軍幼年学校、士官学校である」といって、軍国主義に変わった。それに伴い、生徒たちは教練ばかりをやらされた。渡邊は当時の高校を「国家のために死ぬと言う、ファッショの典型。その下の教官たちもみんな軍国主義になってバカみたいな事ばかりを言っていた」と振り返っている(御厨貴,2000)。

このように東京高校の級長は選挙ではなく学校任命で、模範生となるシステムであった。そのため、級長になる人間は必然的に軍国主義者ということになる。軍国主義でなければ級長になることができないシステムを再び味わうことになり、その結果、軍国主義に対しての憎悪がさらに強くなったと考えられる。

そのような中、渡邊は「おい、今日は教練をボイコットしよう」と演説をし、教室の外にでられないようにしたこともあった。また、軍国主義者や学校体制派の級長や副級長を校庭の裏に呼び出し、ドスで脅迫したこともあった(御厨貴,2000)。

東京高校の記念祭では、火を燃やしてその周りを踊る東高踊りを行うことが学校の伝統であった。その際、渡邊率いる反軍国主義者たちは、暗くなるころあいを見計らい、闇の中に紛れて校長以下に襲い掛かった(御厨貴,2000)。

以上から、この事件は、軍国主義に対しての反抗心を行動に移した事件であったといえる。

翌日学校に行くと、先生から「殴った奴は全員処分する。名乗り出ろ。名乗り出るまでは授業を中止して調査をする」と言われた。密告で処分を食らうのは良くないと考えた渡邊は、寮の部屋を一部屋ずつ回り、殴った者はいっせいに名乗り出ようと呼びかけた。当初は親友4人しか署名をしてくれなかったが、学校任命の級長で絶えず脅かしていた男が、殴ってもいないのに「私が殴った」と言って署名に来た。また、1年文甲の大熊誠が署名に名乗り出た。大熊は、渡邊と接していく中で、軍国主義から自由主義に改宗していた人物であった。大熊の署名もあり、1年文甲の半数である22人が署名に名乗り出た。その後、1年生だけを見殺しにできないと、2年生が署名を行い最後には47人になった。その47人は、暗闇になって電気のない部屋で、長い巻紙に墨で連判した。その連判を提出し、署名したものは結果を待った。

学校当局は全員無罪放免という決定を下した。当時、東京高校は文部省のコントロール下にあった。47人も放校処分になると校長以下監督不行届で処分されることから、処分を恐れ全員無罪放免という結論を出した。この事件を振り返って、「大衆の結束は大したものだと感じた(御厨貴,2000)」と述べている。

この事件で渡邊は、軍国主義に対しての反抗に初めて手ごたえを感じたに違いない。

勉強については、学校の勉強は落第しない程度に勉強し、哲学書ばかり読んでいた渡邊であったが、2年の5月になると、戦況悪化により工場での重機や特攻兵器の生産に連日動員されることになった(魚住昭,2000)。そのため、学校の授業は実施不可能になり、渡邊は教育を受ける場を失った。連日動員された工場で渡邊は不良品を作り、軍国主義に対して抵抗していた(渡邊恒雄,2007)。

このように高校時代の渡邊は、軍国主義に侵されていく高校の中を過ごしていたことがわかる。自由主義であったことを理由に入った高校が、軍国主義に侵されていくことに怒りを感じたことが推察できる。そのため、軍国主義に対する憎悪を、ボイコットや教職員襲撃という行動に移したと考えられる。渡邊にとって、戦争はくだらないものであり、その戦争に突き進む軍国主義は、憎悪の対象であったことが推測できる。軍国主義に教育の機会や自由を奪われた渡邊は、幼少期に芽生えた軍国主義に対しての憎悪をさらに増幅させていたことが推察できる。

3-3 大学時代

渡邊は高校の推薦によって、当時無試験であった東京帝国大学文学部哲学科に入学する。しかし、講義をろくに聴くことのできないうちに渡邊は勤労働員で新潟県の農作業に狩りだされる(魚住昭,2000)。つまり 渡邊は、高校時代と大学時代に度教育を受ける機会を軍国主義によって奪われているのである。

勤労働員中の渡邊は、田植えや草刈りなど辛い農作業の合間にカントやニーチェを読みふけていた。その中で、「この戦争は大儀も展望もない、殺戮を繰り返すだけの愚劣な戦争だ。それでも、まもなく戦場に赴かなければならない。そこで待ち受ける不条理な死に、どうしたら耐えることができるのか」という自問自答を繰り返すうちに、カントの「道徳律」にたどり着いた(魚住昭,2000)。カントの言葉のなかに、「汝の行為の格率が、汝によって、あたかも普遍的法則となるように行為せよ」、「汝自身の人格にある人間性を、つねに同時に目的として使用し、けっして単に手段として使用しないように行為せよ」、「意志が、自己自身を普遍的に立法的と見なしうるような、そのような格率にのみしたがって行為せよ」(石川文康,1995)がある。このカントの道徳律によって死から耐えていた。NHKの番組「独占告白 渡邊恒雄〜戦後政治はこうして作られた昭和編〜」(NHK,2020)では、「道徳的価値は誰にも傷つける事はできない。俺一人のものである」と語っている。

想像するに、憎き軍国主義のために死にゆく状況は、渡邊にとって、屈辱的な状況であったに違いない。その状況で自分の人格的価値を見出すために、カントの道徳律にすがったのだろう。勤労働員中、カントとニーチェを読んでいた渡邊は、彼らの影響を大いに受けたことが推察できる。

カントは、実践理性批判の中で、「権威や伝統が道徳的に正しいかどうかを主体的に吟味し、理性的判断に基づいて行動を選択する。自由は、何が善い事なのか、何が私の能力を進歩させるか、何が他者の幸福に貢献するかと自らに問いかけながら生きるころにある」(西研,2020)と説いている。この思想に触れた渡邊は、理性的に判断することの重要性を学んでいたことが推察できる。

一方、ニーチェは、強者を跳ね除けることが出来ない者が強者を恨み、自分を正当化する行為や思想を「ルサンチマン」と名づけ、著書の「ツァラトゥストラ」では、「ルサンチマンは人類を弱体化させている」と述べている。このルサンチマンを学んだ渡邊は、常に自分の主張がルサンチマン的な主張ではないか、気を付けていたに違いない。渡邊は、カントから実践理性批判を学び、ニーチェからルサンチマンを学んだことで、大局観を得ることができたのではないかと考えられる。

勤労働員中に軍への招集を受けた渡邊は、1945年7月5日に入営した。渡邊が配置されたのは、相模湾の米軍の上陸作戦を激撃するという使命をもった10センチ榴弾砲の部隊であった。当時渡邊が空想していたのは、米軍が相模湾に上陸し10センチ榴弾砲を打ったあと、空間に飛び出して降伏するということであった。捕虜に関するジュネーブ条約を知っていた渡邊は、捕虜になっても米軍は虐待しないと推測していたため、入営後脱走のことばかり考えていた(御厨貴,2000)。

渡邊が三宿砲兵連隊所属していたとき、幹部候補生の試験を受けろという命令を受けたが、幹部候補生になったらそうとうしごかれると聞いていたこと、一年ぐらいで敗戦になると思っていたことから、渡邊は「軍の根幹は兵であります。私は将校になりたくありません。兵としてお国のために」と答えていた。この件を振り返り渡邊は、「最初は褒められたが、何度も断っているうちに怒られ、試験を受ける事になった。口頭試験しかなかったが、合格通知がくる、こない以前に戦争が終わった」と語っている(御厨貴,2000)。渡邊は、13日に除隊命令を受け、15日の午前8時に除隊する。

終戦を迎えたときの首相は、鈴木貫太郎であった。鈴木は1945年4月に首相に就任し、終戦の2日後まで首相を務めた(内閣府)。この鈴木に対して、渡邊は「総理に就任したらすぐに戦争をやめる

べきだったんだ。それをグズグズして、その間に僕らの仲間が特攻隊で殺されていったんだから」と批判している(御厨貴,2000)。

このようにして渡邊は、政治的な遅れによって仲間を失ったのだ。この事件によって、政治的な遅れに対してトラウマをもったと考えられる。そして、政治的な遅れが人の命を奪うことがあると渡邊は身をもって感じた違いはない。

戦時中、天皇制と軍隊が悪いと考えていた渡邊は、この二つを叩き潰すためにどうすればいいのかを考え、終戦後、共産党に入党する。入党のきっかけは、東大に貼ってある各政党のビラであった。そのビラには、自由党や進歩党、社会党などほとんどの党は天皇制護持の内容であり、天皇制打倒と書いているのが共産党しかなかった。その状況に、腹を立てた渡邊は、代々木の日本共産党本部に足を運んだ。本部の柱に、「党員は軍隊的鉄の規律を厳守せよ」と書いてあり、「これじゃあ、もう一つの軍隊じゃないか」と思った渡邊であったが、もうきてしまっているため、入党申し込みを行い、面接を行った(御厨貴,2000)。なかなか入党許可が出なかったが、大学に通って活動しているうちに正式に入党が許され、細胞指導員になって東大細胞全体を動かしていた。当時の渡邊にとって、天皇制と軍国主義は、同等の憎悪対象であったと考えられる。

1947年の2・1ストがあり、共産党に決定的な疑惑を持ったことが、脱党する原因になった。(※2・1ストライキ…共産党と左翼勢力によって1947年2月1日に予定されていたゼネラルストライキのこと)2・1ストのとき、学生党員は有楽座の楽屋に泊まり、蒲団、毛布一枚で数十二人の学生が雑魚寝をさせられた。その後、学生党員は集められ、中央委員から「お前らの任務は、電源爆破である。電源を爆破するために変電所のスイッチを全部切れ。電源を爆破すれば、日本中は向こう五年間暗黒になる。向こう五年間暗黒になれば、人民は飢える。人民は飢えた時に一番利口になる。人民が利口になったときにはじめて革命ができる。だからそのために人民を飢えさせろ」と言われた(御厨貴,2000)。この時渡邊は、大儀の為には人の自由をも奪うという共産主義の本性を目の当たりにし、共産主義とモラルの関係に疑問を持ったことが推察できる。

戦時中、渡邊は天皇制や軍国主義を否定しながら、戦場の不条理な死に耐えようとしたとき、永遠の価値を持つカントの「道徳律」が唯一の救いであった。しかし、その「道徳律」を共産主義の理論に踏みにじられた。渡邊は、革命組織が個人のモラルや自由を侵しているはずがないという思いから、エゴ(主体性)論争を起こした(魚住昭,2000)。この論争を党本部は、「指導部は左翼日和見主義、過激で駄目である」結論づけ、指導部を総退陣させた。そして、新し

い指導部に渡邊を加えることを決めた。

このような経緯で渡邊が事実上東大細胞のキャップになった。東大細胞には細胞員が200人いて、200人で学生2万人を動かしていた。当時を振り返り、「200人いれば2万人の学生を思うように動かせるんです。これが僕の共産党体験で得たもつとも役に立ったこと。1人で100人をどうやって動かすかということです。宣伝煽動で。あの頃学んだことはいろんなことで役に立ちましたね。組織作りとか。(NHK,2020)」と語っている。

その後、渡邊は共産主義への不信感から「主体性の確立」をスローガンに「新人会」を作った。これを党本部が分派活動とみなし、東京地方委員会が東京細胞の解散が決定した。渡邊は除名、他のメンバーは党籍剥奪されたが、自己批判書を書いた人は再登録できるようになった。ここで渡邊ともに離党した者は就職ができたが、自己批判して再登録した者は共産党員のため就職できなかった(御厨貴,2000)。

これを見ると、当時、共産党員は容易に就職できないという社会情勢であったことがわかる。渡邊は、共産党時代、共産主義と戦っていたことがわかる。軍国主義に対する憎悪から入党した共産党だったが、共産主義の実態に触れていく中で、共産主義が軍国主義と重なる部分が多々あったことから、共産党を自由主義に変革しようとしていたことがわかる。しかし、最終的には、変革の工作も叶わず、党本部に党籍剥奪される形で渡邊は脱党した。

3-4 思索社入社

渡邊は、1948年3月、大学に通いながら、思索社に入社した。そして、「哲学」という雑誌の編集長になる。渡邊は、「哲学」を通して、日本中の哲学者に会っていた(御厨貴,2000)。「哲学」は「思索」という総合雑誌になった。渡邊は、幼少期に会得した勉強熱心な一面を活かし、様々な分野の学者と会う中で、膨大な知識を取り込んでいたと推察できる。そして、その経験が、渡邊の圧倒的知性を作り上げることに繋がっていると考えられる。

学生運動や雑誌編集を積極的に行っていた渡邊は、大学の勉強はあまりしていなかった。そのため、卒業論文は安直な方法で行ったという。その方法は、研究室に置いてある「ヘーゲルの弁証法の研究」という本を翻訳するという方法であった。研究室にあったその本の上に埃がたくさん溜まっていたことから、3年ほど読まれていない本であると渡邊は推測した。「ヘーゲルの弁証法の研究」を丸々翻訳すれば、卒業論文が完成すると考えた渡邊は、その本を翻訳することで卒業論文を完成させ、締め切り時間30分前に卒業論文を

提出した。このときに、哲学者ヘーゲルを学んだことが、彼の思想に影響を与えていたと考えられる。弁証法は、テーゼとアンチテーゼを止揚することで、ジンテーゼが生まれるというものである。共産党時代にエゴ論争を起こしたことも、共産主義と自由主義を止揚し、一段階上の思想を作り上げるためであったと推察できる。また、渡邊が後に行う提言報道においても、新聞社として論を投げかける事で、日本全体を巻き込んで止揚し、さらなる良い国家を作ろうとしていたのではないかと考えられる。

大学院の卒業論文は、「ヘーゲルの弁証法の研究」の本をくみ取り式便所に落としてしまったため、書くことができなかった。そのため、渡邊は中途退学という選択を行い、読売新聞社の就職試験を受けた。就職試験に合格した渡邊は新聞記者生活をスタートさせた(御厨貴,2000)。

4 大物政治家から信頼を得るまで

4-1 鳩山一郎に食い込む

政治部に異動した渡邊は、電話での原稿取りを1カ月間行った後、官邸の番記者になった。官邸番記者時代、「抜き打ち解散」や、「鳩山・広川会談」の特オチを経験している。

渡邊は、キャップであった宮崎吉政の命令で鳩山家に通った。初めのうちは、屋敷に入ることさえできなかったが、秘書の石橋義夫と仲良くなったことをきっかけに、応接間まで入ることができた。その後、鳩山薫夫人にかわいがってもらえるようになり、台所や書斎など屋敷内どこでも行けるようになった。書斎には、洋書がたくさんおいてあったため、渡邊はそれらの本を読み、勉強をしていた。この時期に渡邊は、鳩山一郎の番記者となった。

鳩山邸のどこにでも行けるようになっていた渡邊であったが、鳩山派の会議の際は、応接間に入ることができなかった。会議の際、応接間に入ることができた記者は、朝日新聞の若宮小太郎のみであった。朝日新聞の記者は入ることができて、読売新聞の渡邊恒雄は入ることができない状況であった。

この状況を打破するきっかけとなったのは、渡邊がステッキボーイになったことであった。当時、鳩山一郎は脳溢血の後遺症で半身不随であったため、リハビリとして秘書の石橋義夫をステッキ代わりに散歩をしていた。この様子を見ていた新聞記者仲間は、石橋義夫のことを「ステッキボーイ」と呼んでいた。そこで、渡邊は鳩山に食い込むべく石橋に代わってステッキボーイになった。散歩中に様々な話を行い、二人は仲を深めていった。鳩山は、弱っている時

に親切にしてくれた渡邊を信用するようになった。その結果、渡邊は特ダネを度々スクープした。

これらを見ると、渡邊は特オチを経験したことによって、政治家に接近しなければ、特ダネをスクープできないこと痛感したに違いない。そのため、渡邊は積極的に鳩山に接近していったのだろう。ステッキボーイとして鳩山に接近していく中で、情報を得ることができ始めた渡邊は、接近していくことの重要性を強く感じたのではないかと考えられる。

4-2 大野伴睦に食い込む

渡邊と大野伴睦の初めての出会いは、渡邊が大野邸に名刺をもっていったときである。渡邊が何回か大野邸に通ったあるとき、大野が重大な話をした。その話が微妙な話であったことから、大野は、「オフレコで頼む」と記者に言った。渡邊は話の内容とオフレコであることを上司に伝えたが、上司はその内容を記事にして翌日の朝刊で出した。翌日、大野邸に行った渡邊は、大野から「君がこの記事を書いたのだろ」と言われた。渡邊は、必死に記事を書いていないことを伝えたが、大野は信じてくれなかった。渡邊がこの件を上司に相談すると、上司は、「大野番を変える」と言った。しかし、「こんなことでころころ番記者を変わってはたまらない」と感じた渡邊は、次の日の朝早くに大野邸に行って謝罪し、二度とオフレコを破らないと約束し大野邸を去ろうとした。すると、大野に「お茶だけでも飲んでいかないか」と言われ、渡邊は大野と話をした。

後に、大野は秘書である山下勇から、「あれは渡邊が書いたと言って詫びていますが、彼が自分でかいたんじゃない。オフレコと言ったのに、別の人間が書いてしまった。それを彼は潔く謝りに来たんですよ(御厨貴,2000)」と聞かされた。その話を聞いた大野は、「渡邊に負けた」と言って渡邊と密接に関わるようになった。大野は、渡邊の誠実な謝罪や、他人の過ちも被ることができる男気にほれ込んだのではないかと考えられる。

大野と密接に関わることができるようになった渡邊は、大野邸に通う中で客人の靴の向きを直している大野を見る。その姿を見て以来、渡邊は大野邸にくる客人の靴を直すようになった。また、応接間の仕切りなど、秘書のような働きをしていた。そして、客人が帰った後、渡邊は大野と二人だけで話していた(御厨貴,2000)。

大野は、渡邊の働きや、話す中で感じた知性から渡邊を信頼するようになったのだと考えられる。一方、渡邊は大野から信頼されたことで、多くの情報を得ることができるようになったと推察できる。

政治学者の御厨貴は、「多様な人間関係の構築のためには、古い

タイプの記者がよく扱う事件情報や人事情報だけではなく、政策情報や外交事情にも通じていなければならない。言い換えれば、常に勉強を怠らず新しいレベルの情報の開拓をこころがけていなければ、多くの政治家の信頼を得るのは難しい”(御厨貴,2000)と述べている。渡邊の勉強熱心な一面とそれに伴う圧倒的な知識が、大物政治家の信頼を得た要因になったのではないかと考えられる。

ここまでの渡邊をまとめると、母親が教育熱心だったことから圧倒的知性の土台が作られ、思索社で様々な分野の学者に会うことで、圧倒的知性を完成させた。次に、同級生の遠藤の影響から哲学を学び始め、その後、カントやニーチェ、ヘーゲルを学んだことで、大局観を得た。そして、戦時中、軍国主義に自由や人格を奪われたことから、軍国主義に対して憎悪感情を持っていた。さらに、圧倒的知性を活かして、政治家から信頼を得ることができた。

5. 正の側面

5-1 日韓国交正常化

日韓国交正常化を達成するための日本の最大の壁は、大野伴睦副総裁と河野一郎の反対であった。大野は、韓国の暴漢に襲われたことを理由に反対していたと言われている。1962年11月、金鍾泌中央情報部長が訪日した際に、渡邊はインタビューを行っているが、渡邊の『「日本の36年におよぶ植民地支配を謝罪せよ」と韓国人に盛んにいわれますが、あなたはどうかおもいますか」との問いに、金は「36年間、我々のおじいさんや、おばあさん達は、互い合いがみ合いましたが、子や孫である我々までいがみ合うことはないじゃありませんか。私は水に流します」と答えている。この回答に渡邊は、感動し、自分が感動した旨を大野に伝え、反対派である大野に金を会わせることに成功した。実際に会わせてみると、大野と金は意気投合し、これにより大野は、賛成派へ翻った(御厨貴,2000)。

この時、大野は金に韓国に来るように言われたが、年内には行けないと、訪韓を渋った。しかし、その後、酒の席で訪韓すると大野が発言したことを渡邊が記事にし、結果として大野は訪韓せざるおえなくなった(魚住昭,2000)。

ここで、渡邊は大平と金の間で交わされた「大平・金合意メモ」を知った。金と大野の話し合いでは、メモの確認を行い、韓国側の請求額アップの要求を断り、メモ通りの請求額で合意した(御厨貴,2000)。両国のナンバー2同氏の合意が済み、スムーズに進むかと思われたが、池田首相の反対によってこの件は、一旦足踏みすることとなる。この反対の理由について、渡邊は大平外務大臣から、

「私への嫉妬。ナンバー1はナンバー2を嫌う」と聞かされた(NHK,2020) 政策的、イデオロギー的な反対ではなく、個人的感情による反対ということから、渡邊は池田と大野を合わせ、説得をした(魚住昭,2000)。

韓国中央情報部の機密資料に大野と渡邊、韓国の裴大使と崔参事官が会っていることが記されている。その内容は、「ホテルニュージャパンに裴大使と崔参事官および大野と渡邊が会うことになっている、渡邊は大野の事務室にいるそうだ」というものだった(NHK,2020)。渡邊は、大野の事務室で池田と大野を合わせ、話し合いを取り持った。話し合いの結果、池田は大野副総裁の顔を立たせる形で承認した(NHK,2020)。

金鍾泌と大野伴睦つなぎ、大野を反対派から賛成派へと翻らせ、さらに、大平に対する嫉妬から反対していた、池田首相を説得し、請求権に関しての合意まで持ち込んだ。このように渡邊は、政治的調整機能を果たしたのである。

渡邊がなぜ、ここまで熱意をもっていたのだろうか。それは、戦時中の軍国主義に対する反骨心があったからだと考えられる。渡邊は学生時代、軍国主義に教育や夢を奪われたことによって、反戦、反軍主義を持つようになる。さらに日本が敗戦し、挙句の果てに韓国との関係も悪くなったことから、軍国主義に対する反骨心は計り知れないほど大きなものとなっていっていった。渡邊にとって、戦争は負の遺産でしかなく、こうした争いをいつまでやってもくだらないと思っていたに違いない。そのような状況だったからこそ、金の返答が渡邊に響いたのである。その結果、軍国主義に対する反骨心は、日韓国交正常化への情熱となり、積極的に日韓の間を取り持つ原動力になったと推察できる。日韓の国交を正常化し、国益をもたらすことで、ある意味、軍国主義へ復讐をしていたのではないだろうか。

次に、池田首相が合意せず、2か月店晒しにしたことに焦りを感じたのは、終戦時の経験があるからではないだろうか。鈴木貫太郎が総理に就任した時点で、戦争をやめるべきだったにも関わらず、降伏の決断をできず、ぐずついている間に、渡邊は特攻隊で仲間を失っている。政治的な遅れによって仲間を失った経験から、政治的遅れが負の遺産を生むことを学び、政治的遅れがトラウマになっていたのだと考えられる。

さらに、池田の反対は大平に対する嫉妬であることを知った際の行動に関しては、哲学的思想が影響している。生い立ちで述べたように、渡邊は哲学者カントの思想に多大な影響を受けてきた。カントの批判哲学の中には、以下のような一説がある。

「権威や伝統が道徳的に正しいかどうかを主體的に吟味し、理性的判断に基づいて行動を選択する。自由は、何が善い事なのか、何が私の能力を進歩させるか、何が他者の幸福に貢献するかと自らに問いかけながら生きるところにある」(西研,2020)

この思想に影響を受けていた渡邊は、池田の反対理由に対して、感性的かつ欲望的な理由から大局観を失っていると判断したと推測できる。そのため、大局観を持った渡邊が間に入り、半ば押し切る形で説得したのだと考えられる。

これらの要素をもっていた渡邊だからこそ、日韓外交正常化において、重要な調整機能を担えたのだと思われる。

5-2 中曽根康弘に知識与える

渡邊は中曽根康弘の提案で、毎週土曜読書会をすることになった(文藝春秋 digital,2020)。政治は渡邊が、経済は福本邦雄が中曽根に本の内容と意味を教えた。中曽根は二人の解説を一生懸命メモにまとめた。読む本は、政治、経済にとどまらず、哲学書までも扱い、すぐに理解できないことは議論を行った。そのうち、政治を科学的に分析して行動の基準をつくったほうがいいのではないかと思うようになり、「サイエンティフィック・ポリティクス研究会」という会を立ち上げる。この会には、財界の若手や学者、サム・ジェームソン(ロサンゼルスタイムズ)などが集い、様々な分野の知識を交換した(御厨貴,2000)。こういった勉強会を行ったことで、タカ派だった中曽根は進歩的自由主義者になった。

渡邊がなぜこのような知識を提供することができたのか。それは、圧倒的な知性をもっていたからだ。渡邊は幼少期から勉強熱心であったことは生い立ちで述べたが、思索時代に様々な分野の学者に接近していたことが、知性を確かなものにした。哲学だけでなく、様々な分野の学者の思想に触れたことで、渡邊の視点は多角的なものとなっていた。この圧倒的知識量があったからこそ、中曽根に知識を授ける事ができたと推察できる。

また、渡邊が中曽根の提案を受け入れるきっかけとして中曽根へのイメージが変わったことがあげられる。中曽根に対して、「スタンドプレーが目立つタカ派」というイメージがあった渡邊だったが、直接関わると質素で謙虚なイメージが変わった。政治家たちが夜に飲み歩くなか、中曽根は家で読書をしていたというエピソードから、勉強家な一面があることを知る(文藝春秋 digital,2020)。このイメージの変化から、渡邊は中曽根の提案を受け入れたのだろう。

さらに、二人とも戦争に奪われたものがあるという共通点も、渡邊が中曽根の提案を受け入れた要因だろう。中曽根は、戦争によつ

て弟を失い、渡邊は戦争に教育の場、夢を奪われた。その壮絶な戦争体験を共有できたところに要因があると考えられる。

5-3 中曽根康弘初入閣

自民党内で、岸・河野が不仲になり、大野も河野派冷遇の人事をした。中曽根は河野派だったため、河野に頼んでも岸に話をする事ができず、結果入閣することができない状況だった。そこで、渡邊が大野と中曽根を会わせた。大野は河野派の組閣窓口であり、副総裁だった。当日、大野は部屋に入ってくるやいなや、「おい、中曽根。貴様は造船疑獄のときに予算員会で『大野伴睦は賄賂をもらっている。政治生命をかけて言う』とか言ったな。あの時の恨みを忘れていないぞ」と言い出した。ここで渡邊が「ときに副総裁、あなたは竹を割ったような性格ですよ。過去のことなどグズグズ言わない、そういうところがいいところだと言われてきたではないですか。中曽根は野党である改進黨にいたんです。野党時代の発言を恨んで、いま返そうというのは大野副総裁らしくないじゃないですか」と返した。すると大野は、「うん、それもそうだ。ところで中曽根君、きみは宰相の相をしている」と発言をする。渡邊は、「中曽根は河野派で、組閣への窓口がなく運動できずに困っている。副総裁は河野派の推薦権をもっていますよね。なんとか中曽根入閣を推進してくれませんか」と言う。そして大野は「きみは宰相の器だ。そうだな、きみを入閣させる」と言った(御厨貴,2000)。その結果、中曽根は渡邊の仲介で科学技術庁長官として初入閣することができた。

これを見ると、派閥によって入閣することができない中曽根の状況と、かつて渡邊が軍国主義ではないから級長になれなかった過去が重なったことが、大野と中曽根の仲介に入る原動力になったのではないかと推察できる。また、読書会を通じて勉強家な面や謙虚で質素な面から、日本を変えてくれる期待感を感じていた可能性がある。

5-4 閣僚人事に関わる

大野伴睦の死後、船田中が大野派を引き継いだ。旧大野の窓口が渡邊だったため、船田は渡邊に何でも相談していた。内閣改造の際には、渡邊が池田首相と交渉して閣僚の枠をとり、人選に関わるようになった。そこでは、だれが適任か大局観をもって判断していた(御厨貴,2000)。

このように、渡邊は、大野にあらゆる面から助言をしてきた。勉強熱心なため、渡邊の知識は代議士よりも頼りになるということだ

ろう。そのため、大野は渡邊に絶対的な信頼を寄せている。大野のことを一番よく知っているのも渡邊だろう。その二人の様子をみていた大野派の政治家たちも、渡邊に対して信頼を寄せていたに違いない。そうすると大野の死後、渡邊が閣僚人事に関わるのも説明がつく。

人選に関して大局観をもって判断できた背景には、学生時代に哲学を学んでいたことが影響している。渡邊が一番影響を受けた哲学者カントは、実践理性批判で定言命法に従うように説いている。定言命法とは、善意志に従った行動をすることであり、人を手段としてではなく、目的として扱うことである。この定言命法に従い、善意志によって判断したことで、大局観を失うことなく人選にあたることができたのだと考えられる。

5-5 私学助成金カット阻止

中曽根政権時代、税制改革で私学助成金をカットする話が浮上した。この件について、渡邊は中曽根に電話で直接陳情した(御厨貴,2000)。

中曽根に陳情する背景には、日本私立大学連盟の会長で青山学院院長兼理事長の大木金次郎から、「私学助成金をカットされると、私学全体が苦しくなる」と陳情を受けたことがあげられる。当時、普通の子もたちが私学に行き、金持ちで恵まれた家庭の子もが東大にいったことから、「このような状況下で私学の助成金をカットすることはおかしい」と中曽根首相に電話をした(御厨貴,2000)。中曽根は、明け方まで八方手を尽くし、私学助成金は、前年度並みとなった。

この件で渡邊が積極的に動いた背景を想像するに、幼少期に感じた貧富の差による教育の差が影響していると推察できる。また、戦争によって2度教育を受ける権利を奪われた経験も影響していると考えられる。教育の機会を奪われた渡邊は、教育を受ける権利を奪われることがどれほどつらいことかわかっていたのであろう。そんな渡邊だからこそ、多くの若者が教育を断念せざるおえない状況に情熱的になり、「私学助成金カット」を阻止したと推察できる。

6. 負の側面

6-1 リクルート事件に対する報道姿勢

樋口美智子は、「日本の『記者クラブ制度』について」のなかで、比較的政治家に近い距離にいる記者が政治家の汚職を公にしなかったとして、記者クラブの存在を批判している。(樋口,2000)。樋口

からすると、政治家に接近できるにも関わらず、汚職事件に対して批判の姿勢を取らないことは、接近の負の側面であるということだ。そして、リクルート事件に対して渡邊が積極的に批判の姿勢を取らなかったことは、樋口の理論からすると、負の側面になる。

リクルート事件に対して読売新聞は、「税制抜本改革の重要性がリクルート問題に劣るとは絶対に言えない」(読売新聞,1988)として、税制改革を最重要に考えるべきだという社説を出した。なぜ渡邊は、リクルート事件に対しての批判の姿勢を前面にださなかったのか。それはリクルート事件が立件される事件であるという確証がなかったこと、国会が責任追及の場になってしまい、政策について議論することができなくなることの2つの理由があげられる。

リクルート事件について渡邊は、「魔女狩り報道はいっぺん火がついたら燎原の火のごとくだよ。また検察などが立件できないものはリークして社会的制裁を加えようとする。あの時は、『リ』という文字がついたら、もうおしまいだったんだから。これは国家にもマイナスだよ」と語っている(御厨貴,2000)。当時、税制改革が最重要と考えていた渡邊にとって、立件の確証がないリクルート事件は、些細な問題だったという認識だった。その些細な事件に、政策を議論する時間を奪われ、政治決定に遅れをきたすほうが問題だと考えていたことだろう。そのため、渡邊が連載を担当した「This is」のコラム「起点」では、「立法府たる国会で、政敵を攻撃するに、政策をもってせず、私生活の醜聞をもってするのが有効、かつ有利であるとの風潮が支配的になれば、立法府はブラック・ジャーナリズムの負に墜落することになる。政治家が私生活においても清潔であることはのぞましいが、私生活の暴露を政争の手段に供すことは、決して道徳的ではなく、政治的害毒の方がはるかに大きい。」と論じている(渡邊,1985)。

渡邊がこのような見解をもったのは、政治的遅れに対するトラウマと、哲學家ニーチェの思想が影響していると推察できる。

政策について議論すべき国会で、責任追及を行うことは、最重要課題である税制改革の議論の時間を奪うということである。それは、結果的に政治的遅れにつながるということになる。政治的遅れに対してトラウマを持っている渡邊だからこそ、政策についての議論を優先させるべきだという見解をもったのだろう。

また、魔女狩り報道に対する批判は、哲學家ニーチェの影響を受けているといえる。ニーチェは、強者を跳ね除けることが出来ない者が強者を恨み、自分を正当化する行為や思想を「ルサンチマン」と名づけ、著書の「ツァラトゥストラ」では、「ルサンチマンは人類を弱体化させている」と述べている。

渡邊の「魔女狩り報道は、国民的利益に合致する政策実行の妨げになっている」という見解は、学生時代に学んだニーチェの思想に影響を受けていたことがわかる。

6-2 ニセ検事総長事件(魚住昭,2000)

ロッキード事件の捜査がヤマ場を迎えた8月、前澤(当時、読売社会部)は京都地裁の現職判事補・鬼頭史郎に呼び出された。鬼頭は「三木総理が検事総長に対して、指揮権を違法に発動した証拠を入手した」として、電話のやりとりを録音したテープを前澤に聴かせた。事実ならば、大ニュースである。前澤の連絡で読売社会部は特別取材班をつくり、再録音したテープの音声鑑定や補足取材を進めた。その結果、三木に「検事総長」を名乗って電話をかけたのは鬼頭自身とわかった。鬼頭は、三木から指揮権発動の言質をとりそれを材料にロッキード事件の捜査をつぶそうとたくらんだらしい。事件の全容がほぼ解明され、残るは三木本人の談話取材だけとなったとき、編集局長の幹部会議が開かれた。出席者は編集局総務と局次長、社会部長らで、政治部長だった渡邊は、はじめ会議から除外された。社会部を中心に渡邊の政治性に対する不信感が強かったからである。だが、渡邊は編集局長次長兼任の職務権限で会議に割って入った。事件の概要を知ると、その場で社会部に断りなく三木に電話をかけた。ここで渡邊は、「首相は否定したが、ニセ検事総長との電話は事実まちがいない。しかし、首相が否定する以上、記事にできない」と強硬に主張し、報道に反対した。その結果、記事は見送られ、渡邊は、三木に大きな恩を売った。このニセ報道事件は二ヶ月後の10月末、「読売のみ消し問題」疑惑として国会で取り上げられる直前、あやうく読売のスcoopとして紙面に掲載された。鬼頭は、翌年3月、弾劾裁判所で罷免判決を受けて、法曹資格を失い、その後、官名詐称の軽犯罪法違反で有罪が確定した。

この事件について渡邊は、「何でもいから政権を倒そう」という魔女狩り報道になりえることや、安定政権が保てなくなり国民の生活に直接関わることから、慎重な判断を下したのではないかと考えられる。

このニセ検事総長事件は「三木おろし」が水面下で過激化していた際の事件だった。「三木おろし」は、当時首相を務める三木武夫が「クリーンな政治」を打ち出したことによって、周りの政治家から恨まれたことから始まった工作だったと考えられる。その内情を知っていた渡邊だからこそ、記事にしなかったのではないかと推察できる。もし記事にした場合、非理性的な工作である「三木おろし」に加担することになり、渡邊のバイブルである道徳律に反する行為

になると考えたに違いない。

世論には常に注意を払い、重視しなければならない。しかし、その時々々の社会のムードに押し流され、大衆心理に統合してはジャーナリズムの使命は果たせないのではないだろうか。

7. まとめ

本研究では、日本最大のメディアのトップである渡辺恒雄の生涯から、メディアと権力者における接近という現象の功罪について検討してきた。その結果、渡邊が権力者に接近していく中で、負の側面が確かに存在していた。例えば、リクルート事件で積極的な批判姿勢をとらず、批判機能が希釈化された。したがって、樋口が指摘する、「報道と権力の癒着によって、国民の健全な批判の目が失われる危険を伴う」という見解を否定するには至らなかった。

しかし、渡邊が権力者に接近していく中で、正の側面が存在していたことも同時に明らかになった。例えば、日韓国交正常化の中で、韓国側と日本側をつなぎ、円滑化に努めた。このような正の側面を見るに、渡邊が政治的調整機能を担っていたことは明白であり、渡邊が記者という枠組みを超え、内政および外交のいずれにおいても不安定であった当時の日本社会に多大な貢献を果たしたことは否定できない。そして、当時のメディアには、権力に対する批判機能だけでなく、政治的調整機能があったことも明らかになった。この政治的調整機能は、国益という観点からみて、当時のメディアにとって重要な機能であったことが考えられる。

以上のことから、一概にメディアと権力の接近を否定することはできず、負の側面だけではなく正の側面についても吟味したうえで、メディアと権力の関係について検討することが重要であると考えられる。また、渡邊の動向に渡邊の生い立ちが大いに影響していたという事実から、ジャーナリストという表層の分類によって評価することの危うさが浮き彫りとなった。

8. 参考文献

- ・御厨貴(2000)“渡邊恒雄回顧録”中央公論新社
- ・渡邊恒雄(1958)“派閥保守黨の解剖”弘文堂
- ・渡邊恒雄(2005)“わが人生紀 青春・政治・大病”中公新書

ラクレ

- ・魚住昭 (2000) “渡邊恒雄 メディアと権力” 講談社
- ・西研 (2020) “カント『純粹批判理論』” NHK 出版
- ・石川文康 (1995) “カント入門” ちくま新書
- ・渡邊恒雄 (2007) “君命も受けざる所あり” 日本経済新聞出版社
- ・「渡邊恒雄 独占告白～戦後政治はこうして作られた 昭和編～」
(2020) NHK
- ・樋口美智子 (1993) “日本の「記者クラブ制度」について”
<http://id.nii.ac.jp/1060/00003506/>
- ・王勁草 (2017) “リクルート事件に見るマスコミのアジェンダ・セ
ッティングパワー —朝日新聞と読売新聞の分析を中心に—”
- ・文藝春秋 digital(2020) “渡邊恒雄・読売新聞社主筆が語る、「盟
友」中曽根康弘・元首相との 60 年間”
<https://bungeishunju.com/n/n360bb09824c8>
- ・奥村信幸 (2008) “メディアを監視する社会的な必要
—米国 NGO の理念と方法論から学ぶ—”